

歩兵第十六聯隊の雲南・ビルマ作戦

【第1部】

元新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和十八年四月三十日、ニューブリテン島ココボ出帆、五月二十八日フィリピン、ルソン島マニラに上陸、東北方のムニオスで新師団長、岡崎中将の統率下に入った。

五月二十八日より十月十日まで、内地よりの補充員を加え、部隊の再建及び訓練に邁進した。

十月十二日マニラ出帆、二十二日マライ、昭南（シンガポール）に上陸、直ちに北上し中部マライのイポー、クアラカンサル付近に於いて警備に任じ、十九年の新春を迎えんとしつつあった。

昭和十九年一月一日イポー出発、ビルマに入り第二十八軍の隷下に編入、鉄道及び徒步行軍により、ペゲー、ラングーンを経てイラワジ三角州地帯に進出し、本部をバセインに置き、ベンガル湾沿岸南西海上正面の警備を担当する事となった。

聯隊は既に、南の涯ジャワ、東の果てガダルカナル島で戦った。又今度は、西の端ビルマにやって来た。

ビルマに入ってから緒戦はモールメントであった。敵はパゴダや寺院の立ち並ぶ丘に拠って防戦した。しかし我が軍は、寺院や塔に向かって発砲してはならない、かりそめにも寺院や塔を荒らすことがあってはならない、寺院に入る時は必ず靴を脱いで入り仏像に合掌しなければならない、ビルマ人を小乗仏教とけなしてはならない、僧侶には礼儀をつくせ等の教育もあり、一切の発砲を禁じて唯突撃を敢行した。

このことは忽ちビルマ全土に伝わった。ビルマ人の日本軍に対する信頼感は燃えた。戦禍を寺院に避けるのを常としたが、彼等は飲んで迎えた。

マンダレー作戦の為北進する時、避難民は北から南へ南へと避難してきた。南から北へ避難したものはなかった。日本軍の進むところ、我が軍の後方には敵の一兵をもその存在を許さなかった。ビルマの民衆の手で処理されたい。ビルマ人は昂奮し易く血の気の多い江戸っ子気質であり、僧侶や民衆は敵の状況を告げ、陳情もした。内地を思わせる様な水田のほとりで、日本人そっくりの土民に会い、共に相親しみ、カタコトまじりに相語

り、或いは戦友相擁して土民の唄や楽を聴き、煌々たる月を眺めたこともあった。

昭和十九年二月一日より七月下旬まで、ベンガル湾沿岸の陣地構築に任じたが、この間高度分散と雨期のためにマラリヤ続出の時期をつくった。

七月中旬、インパール作戦は失敗し、第十五軍がチンドウィン河以東に後退を開始するに及び、その正面英印軍の追撃は愈々急となり、レド公路方面より侵出した米支軍はフーコン地区に侵入し、該方面の友軍を圧迫しつつ南下、これと呼応して重慶雲南遠征軍も又怒濤の如く怒江を越え、ビルマート沿いに進撃を開始した。

第二師団は、八月中旬断作戦を準備する為、警備を第五十四師団にゆずり急いで雲南方面に進出を開始した。

聯隊は、交通不便な広正面を警備していた為、集結に多くの日時を要し、為に、全部の集結を待つことなく逐次鉄道輸送により前進した。明妙付近から至るところ鉄橋は破壊され、行軍によらなければならなかった。

前進中「速やかにバーモに転進し該地占領してミートキーナ方向より南下中の敵を拒止し軍の側背を援護すべき」との師団命令を受け、バーモに至り陣地構築に任ずること数日、八月末、再び師団主力に迫及すべき命を受け、第二大隊を残置し竜陵に向かい急進、九月二日午後九時、分哨山西側に達した。

【三コブ山の占領及び二ノ山攻撃】

九月三日払暁攻撃の目的を以って、第九中隊に敵砲兵陣地の奪取を命じた。中隊は未知の地形を深く前進し、午前三時頃夜襲により辛うじて奪取したが、中隊長以下多数の死傷者を出した。

聯隊は払暁、分哨山東側凹地に展開を完了し、敵陣地の左側背を包囲する如く攻撃し、正午頃完全に三コブ山を占領し、迫撃砲二門を鹵獲した。本戦闘において、第三大隊長他十数名の戦死傷者をだした。

九月四日、二ノ山攻撃にあたり、聯隊長は薄暮に乘じ敵陣地に接近し、夜襲により奪取するに決し、第一・第三大隊の順に谷地を前進させた。

然しながら、深く錯綜して前進意の如くならず、天明近くに漸く敵陣地前の凹地に集結することが出来た。

ここにおいて聯隊は、黎明攻撃に変更して第一大隊及び第十一中隊を第一線とし、十一

中隊は枯木山、一大隊は二ノ山の陣地を攻撃せしめ、残余を予備隊として一大隊の後方に近く続行させ、四日天明と共に攻撃を開始した

然るに敵の抵抗すこぶる頑強で、特に二ノ山、枯木山及び其の後方陣地より、歩兵砲、迫撃砲の集中火を蒙り死傷続出し、攻撃意の如く進捗せず、堺聯隊長も第一線近くに進出して攻撃を督励中、胸部貫通銃創、鎖骨骨折の重傷を受け、指揮を第一大隊長に託すのやむなきに至った。大隊長は攻撃を続行し辛うじて前進陣地を奪取したが、主陣地を奪取するに至らず、師団命令に依り一部を残置し、主力は暗夜を利用し転進、一ノ山北側地区に集結、爾後の攻撃を準備した。

九月十日、第二次輸送部隊到着、翌十一日には、バーモに在った第二大隊長高橋少佐も追及し、新たに聯隊長代理として指揮をし、再度二ノ山攻撃を実施した。

九月十三日、第一大隊は第三中隊を第一線として枯木山の敵を攻撃、主力を以って二ノ山の敵を攻撃し、大隊砲、機関銃の援護射撃のもとに突入を敢行、奮戦格闘の後完全に占領した。これより約三週間陣地を確保し、数次に亘る敵の反撃をことごとく撃退し、守備の任を全うした。

聯隊の損害は、戦死七百七十三名、戦病死八十名、行方不明十五名、合計八百六十八名に上った。

師団はかくして、竜陵附近一帯の敵を東方に撃攘して重囲中の友軍を解囲し、第一次断作戦の目的を達成、新たなる軍命令により守備を五十六師団と交代し、マンダレー方面に転進することとなった。

昭和十九年十月十九日、新聯隊長、井之上大佐が就任され、部隊は依然戦力の培養を図ると共に、警備、防衛を担当した。

昭和二十年一月上旬、メーカーラに移駐を命ぜられ、青葉支隊（兵団長井之上大佐）を編成、メーカーラ及び其の附近の警備を担当した。

【イラワジ河畔の会戦】

盤作戦の進捗に伴い、青葉兵団は軍の作戦に即応すべくミンジャン附近に前進し、第三十三師団（弓兵団）の指揮下に入る為、二月五日メーカーラより前進を開始した。

聯隊は二月十三日夜、ミンム正面に進撃を下命された。当時第三大隊は、弓兵団命令によってミンジャン西北方イラワジ河畔の戦闘に参加していた。

二月十四日攻撃開始を命ぜられ、聯隊は全部の集結を待たず、未明より急進した第一大隊を以って弓兵団右翼に連携し攻撃開始、戦闘に加入した。

聯隊は二月十六日未明、歩兵第三十五聯隊第一大隊（高崎）を配属せられ、イラワジ河、南岸渡河点たるカンラン附近の陣地に対し、緒戦の火蓋を切った。

敵機は十数機編隊で、連日早朝来、超低空で我を攻撃し、昼間は少数兵力でも行動は困難であった。聯隊将兵は井之上青葉兵団長の訓示を体し、精強第二師団を代表し本イラワジ河畔会戦に参加した。重責を一兵に至るまで、肝に銘じ破竹の勢いを以って奮戦力闘、敵の半渡に乗じ之を撃滅することに邁進した

第一大隊の勇敢なる包囲急襲によって、カンラン附近の敵根拠地は覆滅したが、敵は我が猛攻を阻止するため急遽兵力を増強し、兵団正面を避けつつ東進、軍右翼、列兵団（三十一師団）正面に殺到した。

二月十九日、列兵団の左翼方面の危急化に伴い、第三大隊をして之を攻撃させた。三大隊は列兵団との戦闘地域の境界線上にあった。敵は兵力約三百、戦車七～八両を有し、タリンゴン附近の我が陣地を占領した。

加えるに天明後には、我が一兵に対しても飛行機は銃撃を加え、トラック、装甲自動車で兵力の増強を図っているため、大隊の攻撃は急を要し、準備不十分のまま十九日夜より二十日天明にかけ攻撃を決行した。

然るに敵の配備変更に会い主陣地を確認できず、思わざる戦闘を惹起し遂に失敗に期した。更に斬込隊を以って潜入攪乱し、日没と同時に攻撃を強行したが、不意に戦車四～五両よりなる円形陣に衝突し、之を撃滅するに至らず苦杯をなめた。

タリンゴン奪回は急を要し、陣地を強行突破すべく第三大隊は決死敢闘、二十三日夜、主力を以って殴り込みを行い、奮戦乱闘五～六時間の後、遂に之を確保した。

（新発田聯隊史より）